







博士論文審査書 (○課程博士・論文博士)

論文名	松谷みよ子 昔話の再話と民話系創作文学の研究 —昭和三〇年～昭和四五年—			
	(英文タイトル) The Study of Retold Tales and Creative Folklore in the Literature of Miyoko Matsutani : From 1955 to 1970			
学籍番号	95322001	氏名	来栖 史江	
所見 別紙、「論文内容の要旨および審査結果の要旨のとおり」				
審査結果	○可 ・ 否	学位記 番号	第 19 号	
主査	吉瀬 雅之 	副査		
副査	田中 裕之 	副査		
副査	前田 久子 	副査		
論文提出日	論文審査日	公聴会	可否決定日	博士学位授与日
2022年11月30日	2023年1月6日	2023年2月18日	2023年3月8日	2023年3月16日

論文内容の要旨および審査結果の要旨

当該論文は、戦後の日本を代表する児童文学作家として知られる松谷みよ子が、昭和 30 年から 45 年にかけて民話を再話した作品として「三枚のお札」と「山姥の錦」、素材とした創作作品として「龍の子太郎」「まえがみ太郎」「ちびっこ太郎」を取り上げる。作品に選ばれた原話からの考察、各作品の変遷と特徴への考察、作品と作者の関わりについての考察から成る。

序論は、論中で使用する作品分類や用語が、松谷の考えに基づくものであることを明らかにしている。「民話」の再話や再創造が盛んに議論された作者の時代を映すと位置づける。次いで、松谷を児童文学の世界に呼び込んだ人物として、一生の師となる坪田譲治を挙げ、作品作りに大きな影響を与えた瀬川拓男の存在の大きさを述べる。更に、幼少期の松谷には民話との接点こそないが、当時の読書体験の中で「わらべ唄」との出会いが、後の再話に活かされていることを示唆する。

本論の第一部第一章は、「三枚のお札」を取り上げ、約 500 話を 10 の型に分類する。その中から、松谷は「鬼を一口」型を選び、特に唄やとなえ言葉が多く用いられているもの、山姥が小僧の叔母だと名乗る話が好んで選ばれていること等を指摘する。語り方を活かし、臨場感豊かな再話がされていると説く。瀬川拓男の影響から小僧を主題とする二話も見受けられるが、最終的には原話を尊重して、機知に富んだ頼れる和尚を主題としたところに松谷の「三枚のお札」の完成が認められると結論づける。第二章では、「山姥の錦」が、堀井徳五郎の伝承する心優しい山姥を取り上げているところに大きな特徴を認める。特異な話だが、臨地調査によって堀井の創作ではなく、土地に伝承されていた話であることを明らかにした。山の神的な心優しい山姥を重視したうえで、原話より積極的な「あかざばんば」の姿を描いたところに、松谷の再話姿勢があったと指摘する。堀井の語り口を活かしながら、現代の子どもたちが理解できる語り表現を模索したことに、松谷の創意を指摘する。

第二部第一章は、「龍の子太郎」が塩田平系と松本・安曇平系の二つの「小泉小太郎伝説」を合わせ用いていることを確認する。特に幼少期の「食っちゃあ寝」という、決して優等生ではない部分が、主人公の太郎像に選ばれていることを重視する。体力的な「強さ」と内面的な「賢さ」を手に入れて村を救う英雄となるところに、日本の理想となる太郎像が見出されていると論じる。龍の子太郎の母が龍になる話の背後には、自身の「悪阻」が「結び目」として機能していることを指摘する。第二章の「まえがみ太郎」では、秋田の民話に見出される「火の鳥」を「不死鳥」へと変化させ、ロシア民話からの着想を加えた創作となっている様子を詳述する。幼少期は優等生とはいえないが、成長して自ら考え行動し大事業を成し遂げる「まえがみ太郎」の姿勢が、「龍の子太郎」とつながることを明らかにする。執筆当時、離れきることのできなかつた太郎座への思いが反映され、「捨てる」ことが「結び目」となっていると論じる。第三章の「ちびっこ太郎」にもっとも重視されたのは山形県舟形町の「葦盾の城」であったと指摘する。「ちっと足りない」が正直者で、仲間と共に進もうとする太郎像が示され、ロシア民話「せむしのこうま」のイワン像に近い「人間太郎」が描かれたと指摘する。こうした太郎像を手に入れることができた背後には、劇団太郎座を離れて、自分の意志で手に入れた小さな家に娘たちと移り住む経

験が、「結び目」になっていると述べる。

松谷は民話と出会い、再話と創作を繰り返す中で、子供のために書くという目的を得てゆく。自身の惹かれた民話を再話し創作する中で、語り手がいなくなると消えゆく民話を児童文学作品化し、子供の世界に近づけ得たと論じる。

口頭審査では、第一部が「三枚のお札」と「山姥の錦」の二作のみの再話を検討しているのに対して、他の再話にも目を向けるべきではないかとの指摘があった。今回の考察を礎とした更なる研究が望まれる。第二部が創作と作者との「結び目」に着目しているのに対して、第一部には該当するものが論じられていないことが指摘された。再話には、創作と位置づけられるほどの大きな変更は見出されないが、多くの民話から特徴ある一話を選ぶところに作者の存在が見出される。再話と作者との間にも何らかの接点が認められるべきべであろう。更なる研究が望まれる。再話に創作性が含まれる以上、創作との区別には曖昧さが残されるとの意見も示された。松谷の分類に準じることにも課題が垣間見える。とはいえ、松谷みよ子と作品研究の今後に大きく資する論となっている。博士の学位を授与するに相当する成果を示し得ているとの結論を得た。